

# JFL環境におけるドイツ人日本語学習者の「助詞」の特徴

村田裕美子（ドイツ・ミュンヘン大学），李在鎬（早稲田大学）

## 【研究目的】

コーパスを用いて，JFL環境で学ぶ日本語学習者の発話の特徴；「助詞」の使用傾向 をJSL環境の学習者の発話と比較しながら明らかにする。

## 【結論】

1. 格助詞「が，で，と，へ，を」では，初級・中級レベルにおいて，JFL環境の学習者のほうがJSL環境の学習者より使用頻度が高い。
2. 終助詞「ね」は，全レベルにおいて，JSL環境の学習者のほうがJFL環境の学習者より使用頻度が高い。

以上のことから，自然な日本語のインプットが多いJSL環境の学習者のほうが，助詞の省略化や終助詞の習得がすすんでおり，学習環境や日本滞在歴が言語の習得に大きく影響すると考えられる。

## 【調査データ】

**JFL環境の学習者データ：**「ドイツ語話者日本語学習者話し言葉コーパス（Spoken Corpus of German Learners of Japanese; 以下GLJ）」（村田・李2015）」

**JSL環境の学習者データ：**「KYコーパス（以下，KYE）」

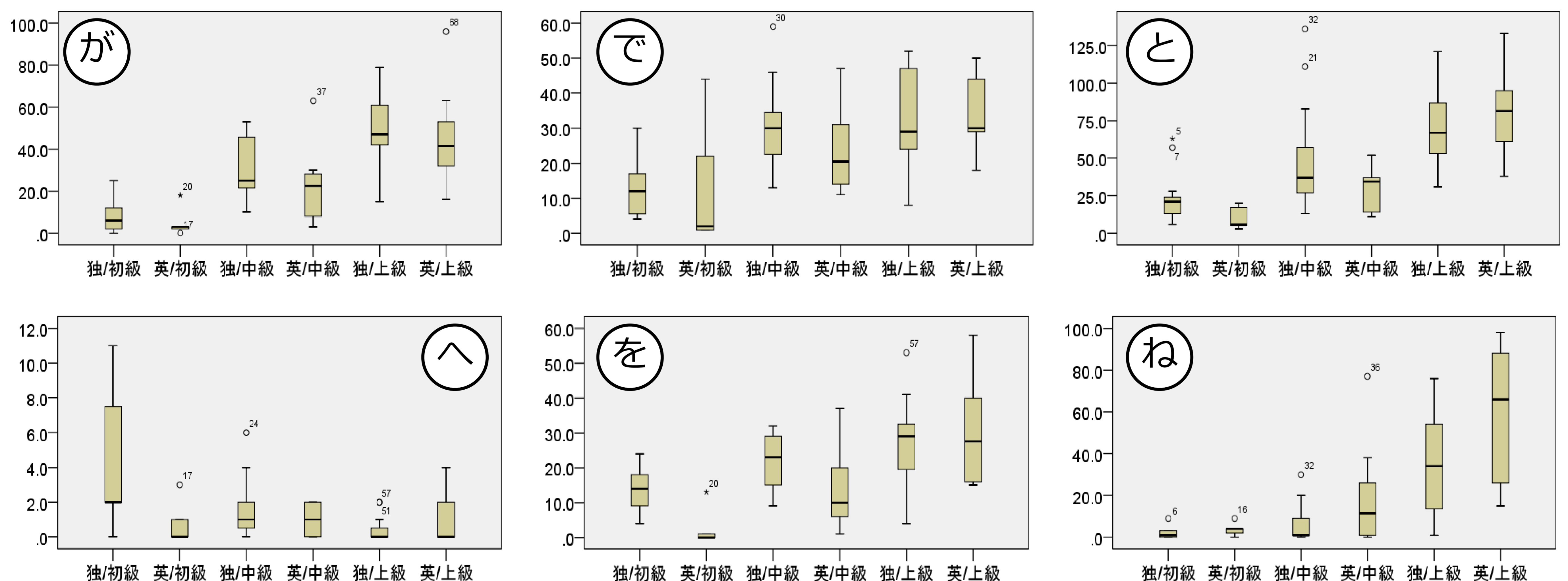
KYEについては，母語レベルの類似度の観点から英語母語話者のデータのみ利用した。分析に使用したのは，GLJの初級15名，中級15名，上級15名のデータ，そしてKYEの初級5名，中級10名，上級10名のデータである。

コーパスサイズ：GLJ + KYE = 202,123語，平均使用語数:2,887語/1人

## 【調査方法】

1. 全ての文字化データをMeCabとUniDicを用いて形態素解析した。
2. 学習者一人あたりの格助詞「が，から，で，と，に，の，へ，を」と終助詞「か，ね，よ」の使用頻度を計算したあと，OPIレベル（初級・中級・上級）×母語（ドイツ語・英語）で6グループを設定した。
3. SPSSで記述統計量を計算し，箱ひげ図を用いてデータの分布を確認した。

## 【調査の結果】



## 【総合考察】

1. **格助詞**：自然会話では助詞を言わずに会話が進むことは多くあるが，教科書，特に初級では，そのような日本語の特徴については説明が少なく，練習や指導も十分ではない。そのため，自然な日本語のインプット量が助詞の省略に影響したものと考えられる。
2. **終助詞「ね」**：JFL環境の学習者が使う「ね」は「そうですね」や「いいですね」など言葉のかたまり（chunk）として学習した定型的表現が多かった。一方，JSL環境の学習者が使う「ね」には「私ね」や「でもね」「ですとかね」「ですけどもね」など教科書ではあまり扱われない形が各レベルで現れた。このような「ね」を用いるには十分な自然会話のインプットが必要であり，初級から「私ね」と言えるのは学習環境や日本滞在歴が大きく影響していると考えられる。